

通訳者としてのプロ意識の生む通訳者の存在価値とは —中・日通訳トレーナーの視点から—

(中国) 大連外国語学院 張 宇澄(客員研究員)

国際化が進んでいる今日、「通訳」に触れる機会も確実に増えている反面、「通訳」を考える機運が相応に高まっているとは言えない。一時の接触者は勿論、常時の従事者にとっても多くの場合、「通訳者」はまさに「近くて遠い存在」である。このような矛盾した現象をもたらす最も大きな要因としては、理論と実践の乖離が著しいということが考えられる。

通訳研究が世界範囲で遅れている中で、本講演は、聴講者とともに、もう一度原点に立ち返り、通訳領域の「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」のような根本的な問いへの回答を考え直すことによって、実践に還元できるような実践から抽出したエッセンスを味わうことができると願うものである。

核心内容は、あり方・構え方があってはじめてやり方が活きる。そして、やり方が生きてはじめて真の価値を生み出せるという発想から、他人の研究成果・自分の現行課題・授業展開の方法・通訳教育の現状に関する話と結び付けながら、通訳者のプロ意識をあり方・構え方・やり方という三つの層で、さらに通訳者の存在価値を無形の価値・有形の価値という二つの面で考察を試みることである。

具体的には、まず、あり方については、役割・プロセス・適性という三つのキーワードに焦点を絞り、次に、構え方については、事前準備・経過監視・事後反省という三つのステージに定点を置き、それから、やり方については、翻訳者との差別化・バイリンガルとの差別化・外国語学習者との差別化という三つの側面にスポットライトを当てることによって、「通訳サービス」のプロバイダーであると同時に「通訳プロダクト」のメーカーでもあるという通訳者の存在価値を自然に導き出す、という展開で、講演者の「通訳者は、異言語・文化の間で、直訳 - 意識、略訳 - 補訳、静訳 - 動訳といった究極の二択を絶え間なく迫られる中で、常に状況に応じて的確に判断し、柔軟に対応することで、コミュニケーター＝伝達者の役割を果たさなければならない」というような通訳観を、聴講者と共有することを狙う。